

田舎の両親

家電が見守る



冷蔵庫の利用回数が減るとセンサーが感知して、家族の携帯電話にメールで知らせる(アートデータ・世田谷)

独り暮らしのお年寄りの安否を遠くからでも確認できるサービスが相次いで登場している。お年寄りがよく使うポットなどの電気製品をインターネット網に接続することで、お年寄りが実際に製品を使ったかどうかパソコンで分かる。といった仕組みが普及している。高齢化の進行を背景に、「こうしたサービスへのニーズが高まっていくのは確実だ」。

早めに異常を察知

冷蔵庫やドア、トイレのマットなど頻繁に使うものにセンサーを取り付け、24時間態勢で安否を知らせる方法もある。システム開発の「アートデータ」(東京・世田谷区)のサービスは、センサーとお年寄りの家の一般電話回線をつなぎ、冷蔵庫などが指定された時間を過ぎても利用されない時に、データを管理するコンピューターが、子どもの携帯メールなどに「異常」を知らせる。

このコンピューターには、冷蔵庫などの利用頻度を記憶する機能も備えられ、その平均値から推測することで、異常を知らせることもできるという。同社は、就寝中

のお年寄りの呼吸や、心拍数の異常から緊急時を知らせる生体センサーも開発している。

これらの製品について、小林明夫社長は「個人に合わせた設定を基に、早めに異常を察知できる」と効果を説明する。

パラマウントベッドが、今秋から介護支援事業者向けに発売しているベッド「楽匠」自立促進シリーズ」には、ベッドの利用状況を確認できるサービスが、オプション機能として用意された。

ベッドの高さや背中の角度といった操作の様子を、備え付けの無線通信機がインターネットを通して、事業者に知らせる。設定時間内にベッドの操作がない場合などには、ケアマネジャーの携帯メー

ルにも連絡が行く。メールの送信先に家族を加えることも、事業者の判断で可能という。

自治体向けにも

電気通信業の「YOZAN」(東京・豊島区)が自治体向けに設計した安否確認システムは、携帯電話よりも強力なポケベルの電波を活用している。まず、お年寄りに5・7彩の液晶画面付きの受信端末を置き、自治体の福祉担当の職員が毎朝、パソコンから端末へメッセージを送る。お年寄りには端末にある「元気」「体調悪い」「連絡して」の3種類のボタンで返信してもらうことで、職員らは健康状態を把握できる。

埼玉県和光市は今春から、このシステムを導入し、独り暮らしなどの高齢者を中心に、端末を無料で貸与している。同社のマルチキヤスト事業本部の加藤裕一さんは「居住者が高齢化している大規模マンションの管理組合にも売り込んでいきたい」と話し、システムの普及を図っている。

NTTドコモは高齢者向けの携帯電話「らくらくホン シンガール」を年内に発売する予定だ。携帯電話を充電すると、家族の携帯電話にメッセージが届く機能が搭載されている。